

意見書

環境について

2005.7.7 栗林勝彦



左の写真は、空気中の自動車排気ガスを吸い過ぎて空洞化した樹木の写真です。このような樹木が、成城三丁目緑地でも確認されています。隣接地である砧中学の観測地でのNO₂の最高値は0.047です。しかし、観測以上に現状でも大気汚染が進んでいる証左とも言えます。

大気質の現状把握、及び将来予測のためにも、とくに国分寺崖線上の東名道沿いなどJCT周辺

については密な観測が必要です。

前回の世田谷地域の地層断面図による資料に関して説明不足がありましたので、補足します。西側立川面では、基盤である上総層群の上位に旧多摩川の氾濫源性段丘礫層である立川礫層があり、その上位は立川ローム層です。東側の武蔵野面では上総層群の上位が東京層と呼ばれる粘性土層、その上が武蔵野礫層と呼ばれる段丘礫層、地表面は武蔵野ローム層が被覆しています。立川層縁辺部には野川沿いに河川の浸食により形成された谷底低地が形成されています。武蔵野段丘礫層中の地下水は、段丘ハケで湧水として地表に湧出しているほか、二次堆積層中の透水性のよい砂礫層等の地層を水みちとして野川に流れ込んでいると想定されます。(以上は、東京都土木技術研究所の地層構成模式図、及びボーリング調査を基にした地質調査会社の所見です。)

このことから、もしも外環が出来れば、野川の流量に大きな影響があるのでないかとの心配が地元にあります。既存資料に頼らず、更なる綿密な現地調査が必要だと思います。

第三回会議提出の意見書でも指摘しましたが、定量的に示せる基準はその数値を、定性的なものについては評価のポイントを事前に示さないと、PI的なアセスメントになりません。とくに、当世田谷地域が都市の貴重な自然環境に恵まれている場所であることを考慮すれば、ここの生態系をどう評価するかは重要です。持続可能性を重視する生態系の保全が当該地の環境劣化を防ぎます。生物多様性が環境のバロメーターであることを考えれば、生態系の評価に関しては担保となるべき評価指標の明確化が必要です。

PIという外環計画検討の意義を考えれば、環境影響に関する地元住民からのヒヤリングが今後必要です。最近の住民からの問題提起や情報提供を思えば、このことの重要性をあらためて痛感します。